

《研究ノート》

『アッカーマン』覚書

橋本郁雄

「またしても『アッカーマン』?」という書き出しで、東ドイッ・ハレの歴史家 Anton Blaschka は彼のある論文<sup>(1)</sup>をはじめている。最近の『アッカーマン』(Der Ackermann aus Böhmen) 研究の盛況ぶりについては、『言語文化』(一橋大学語学研究室編) 第六号(一九六九年)の拙稿<sup>(2)</sup>においても触れたが、本稿では一九六〇年代にあらわれた研究の中でとくに重要と思われるいくつかの問題について簡単な紹介を試みたい。その前にまず、わが国における『アッカーマン』研究の状況について述べておこう。

日本における『アッカーマン』研究

『アッカーマン』に関する邦語文献は、私の知る限りでは、次の六篇である。<sup>(3)</sup>

(一)塩谷饒「Der Ackermann aus Böhmen」の語法について

て」《独逸文学研究》京都大学分校独逸語研究室・報告第二号(一九五三年)一—二頁

(二)Takashi Sakayori (酒寄喬) : Die Stellung des Verbums im „Ackermann aus Böhmen“, 東京大学文学部卒業論文、一九五四年(未印刷)

(三)尾崎盛景『アッケルマン』の周辺《藝文研究》(慶応大学藝文学会) 第十一号(一九六一年)八七—一〇〇頁

(四)熊谷恒彦「Ackermann aus Böhmen」について」《大和邦太郎教授記念論文集》東京都立大学・人文学報 第三十八号(一九六四年)五一—六五頁

(五)神保謙吾「ヨハネス・フォン・テンプル『ゴヘミア人アッカーマン』」(第一章—第十七章)《ドイツ文学研究》(日本独文学会東海支部) 第四号(一九六六年)、(二)(第十八章—第三十四章)《名古屋大学教養部紀要》第十一輯(一九六七年)

(六)神保謙吾「『アッカーマン』の解釈について」《名古屋大学教養部紀要》第十一輯(一九六七年)一五—二二頁

(一)はおそらくわが国における最初の『アッカーマン』研究であろう。十五世紀初頭のこの散文作品の音韻と文法を、ルターのドイツ語と対比し、その言語史的な位置づけを試みたもので、K. Spalding (Oxford 1950) や L. L. Hammerich-G. Jungbluth (København 1951) の両校訂本に共通にあらわれた語法が中心になっている。

(二)は未見であるが、テキストとしては、もっぱら、当時東大

独文研究室に頁も切らないまま眠っていた Bertt-Burdach の校訂本(一九一七年)が使用されたとのことである。

このように、わが国の『アッカーマン』研究は一九五〇年代に、語法研究をもつてはじめられたのである。

(三)は『アッカーマン』そのものではなく、この作品を成立させた時代ならびに文学的環境を解説してゐる。Spalding と W. Krogmann (Wiesbaden 1954) の両校訂本のイントロダクション、W. Stammeler: Von der Mystik zum Barock (1950), G. Müller: Deutsche Dichtung von der Renaissance bis zum Ausgang des Barock (1957) などが主たる参考文献として使用されているが、著者の『アッカーマン』観は次のことばに集約されよう。

『アッケルマン』は、形式と主題の点からだけ言えば、論争文学として別に新しいものではなく、或いは「陳腐」なものであるかもしれない。それにもかかわらず、『アッケルマン』の中に、われわれを感動させる何もかがあるとするならば、それは、妻の死という作者の悲痛な体験によることは勿論であるけれども、それを表現する文章への作者の執拗な関心を見逃すわけにはいかない。(九十六頁)

(四)は一九五九年までの研究成果をふまえて、「テキスト」と「解釈」の問題を中心に作品の解説を試みたもので、「Hammerich」や Krogmann のラディカルな見解にくみする勇氣がないので「原文の引用はもっぱら「穏健な見解に終始している」Spalding に拠ったと断っている。解釈については、この

作品が「中世的基礎をはなれることなしに新しい時代に向って手をさしのべている」という Arthur Hübner のことばを引用して「作品の芸術性はただ技巧的な点だけにあるのではなく、われわれを感動させる文章を支えているのは、作者の真率な感情であるとともに、近世の黎明期をはかんに感じさせる新しい態度である」と述べてゐる。

(五)はもちろん本邦初訳。Krogmann の校訂本に拠る翻訳と思われるが、何に拠ったかは明記されていない。『アッカーマン』のように校本間の異同の大きいものにあつては、とりわけ底本を明確にする必要がありはしまじか。

(六)の「解釈」にあつても Krogmann の見解が尊重されているようである。著者は、この作品が現実の体験をもとにして創り出された芸術品であることを強調して、「生身の体験から出発して信仰の世界にはいるということこそ貴重な点であつて、それはほぼ一世紀後に現れた宗教改革運動の萌芽とも見られるだろう」と述べる。ここに「何時の世にも変らない人間の苦しみと歎きと、そしてまたそれに打ち克つための人間の努力のあと」を見ているのである。

『アッカーマン』における問題点

さて、『アッカーマン』は、愛妻を死の手に奪われた悲痛な体験から生れた、血を吐くような「告白文学」であるのか、それとも、友人に送ったいわゆる「献呈書簡」(Widmungsbrief)

(注12参照)の中で作者自身制作の意図を明らかにしているように、そしてまた Blaschka や Hübner などが主張するよう  
に、一個の Stilkunstwerk であるのか、あるいはまた René  
Brand-Sommerfeld<sup>(9)</sup>に代表されるように、その両方であるの  
か、作品理解の根本問題において、諸家の見解は必ずしも一致  
を見ていないのである。Jungbluth のことはを借りるならば、  
「譯者はそれぞれ独自の『ブッカーマン』像をもちまわって  
いるという印象」がしばしば、『ブッカーマン』をめぐるとロ  
ンの混乱は近年いよいよひどくなる感さえある」といふ。  
たしかに、『ブッカーマン』には未解決の問題があまりにも  
多い。しかし、過去五十年間にわたる『ブッカーマン』研究の  
歴史を顧むるとき、研究の輝しい成果に目を見はらむを得な  
くであろう。『ブッカーマン』研究の基礎を築いた Konrad Bur-  
dach と Alois Berit<sup>(10)</sup>に対する批判者として画期的業績をあげ  
た Arthur Hübner と Louis Leonor Hammerich、またあな  
ごへ Anton Blaschka<sup>(11)</sup>の名も逸すはわけにはいかならぬ。やが  
に Johannes von Tepl が『ブッカーマン』を竹馬の友 Peter  
Rothirsch に贈ったとき、これに添えたラテン語の手紙、  
いわゆる「献呈書簡」の発見者 Konrad Josef Heilig<sup>(12)</sup>や「精力  
的に研究を押し進め、きわめてユニークなテキストを編んだ  
Willy Krogmann 等」は、『ブッカーマン』研究史上忘れられ  
ておけない大きな名前であるが、ここにきわめて重要な原資料  
の発見者として新たにチェッコの歴史家 Karel Doskočil の  
名を加えなければならぬ。

『ブッカーマン』の原拠の発見

『ブッカーマン』の原資料に関する Doskočil の重大な発見<sup>(13)</sup>  
が、ドイツの学界で知られるようになったのは、Deutsche  
Vierteljahrschrift für Literaturgeschichte und Geistes-  
geschichte 37 (1963) に寄せられた Krogmann の論文<sup>(14)</sup>(  
五四—二六五頁)、『Neue Funde der Ackermannforschung』  
に於いて、Doskočil 論文そのものはまだ入手していないが、そ  
の大意は Krogmann の上掲論文と Blaschka の論文<sup>(15)</sup>によ  
って知ることになる。

フランスの Metropolitankapitel-Bibliothek 所蔵の十四世紀  
後半のラテン語の古写本に次のような内容の論集がある。

1. Bl. 3<sup>a</sup>—8<sup>a</sup>: Seneca, De quatuor virtutibus cardinali-  
bus
2. Bl. 8<sup>b</sup>—26<sup>b</sup>: Richardus a S. Victore, De caritate
3. Bl. 27<sup>a</sup>—52<sup>b</sup>: St. Bernhard, De contemptu mundi  
(maior)
4. Bl. 53<sup>a</sup>—55<sup>a</sup>: Tractatus de crudelitate mortis
5. Bl. 55<sup>b</sup>—64<sup>b</sup>: Bonaventura, Speculum seu Itinerari-  
us
6. Bl. 65<sup>a</sup>—66<sup>b</sup>: Augustinus, De honestate mulierum
7. Bl. 67<sup>a</sup>—68<sup>a</sup>: (Totentanz ohne Überschrift) Incipit:  
*Vado mori, res orta; Explicit: metrum reciprocum d;*

morle.

右の論集は全六十八葉七篇より成るが、最終丁(Bl. 68<sup>v</sup>) explicit の前に次のようなラテン語の書き込みがある。

Item nota, quod Ulrichus concessit Johanni Teple super isto libro quartum medium grossum.

最後の部分に Doskocil は „dal...za tuto knihu 1/2 4 groše“ 即ち「Ulrich 氏の本書を Johannes von Tepl から三ノロシマン半で買った」と読んでゐるが、Blaschka は Ulrich なる人物(市裁判官であろうと言っている)が三ノロシマン半をこの本で Johannes von Tepl に「貸した」と解している。三ノロシマン半は本の代価としては安すぎるからと云うのである。いづれにしても、この論集が『アッカーマン』の作者の手もとにあったことは間違いない。しかもこの論集の中には、内容上『アッカーマン』との対応が多々見出されるのである。とくに死の残忍さを歌った作者不明の詩《Tractatus de crudelitate mortis》が、『アッカーマン』の作者にインスブルークを与えたであろうことは疑うべくもなう。Krogmann は Blaschka も一聯七行より成る二十六聯の全詩を掲げて、その内容を『アッカーマン』と対比してゐるが、Krogmann の対応箇所の指摘は、実に二十五箇所にも及んでゐる。また St. Bernhard の《De contemptu mundi》の第二章は、死神が人間の無価値を数えあげてゐる『アッカーマン』第二十四章のモデルであるという Doskocil の指摘も正しいであろう。このきわめて有力な原資料の発見によつて、Doskocil と Blaschka も、『アッカー

マン』が、作者自ら「獻呈書簡」の中で言っているように、修辭法の練習として試みられた作品であるという見方をいっそう強めるが、一方 Krogmann は、この資料が『アッカーマン』の直接の手本となつたことは認めながら、『アッカーマン』が体験文学であることには變りはないと主張している。

『アッカーマン』の作者について

『アッカーマン』の作者については、永い間 Johannes という名しかわからず、作中のボヘミアの地名に従つて Johannes von Saaz と呼ばれてきたが、「獻呈書簡」の中で、作者自ら Johannes de Tepla, civis Zaecensis、即ちザーツの市民、ヨハネス・フォン・テープルと称してゐるので、「獻呈書簡」の発見以来、Johannes von Tepl と呼ばれることが多くなつた。ヨハネスの出身地 Tepl は Bger と Pilsen の中間に位置し、當時はかなりの町で、学校所在地としても知られてゐた。しかし、Hammerich や Jungbluth のように Johannes von Saaz を用ゐる学者もゐる。

Doskocil は『アッカーマン』の作者の父 Hensinus de Sitor についてもまた、新しい発見をした。ブラハの堅信礼台帳《Libri confirmationum》第三巻の中に記されたある記事から、父がその出生地 Sitor (チェッコ語表記 Sitor) の富裕な司祭であつたこと、そして一三七五年五月七日にはすでに死んでゐたことが明らかになつたのである。妻帯しないはずの司祭

に子供がいるというのは、当時としては決して珍らしいことではなかった。父は妻の死後、聖職者になったのではないかと、う推測も行なわれているが、さらにはアッカーマンの妻の死は、作者の父の体験が織りこまれたものではないか、と『アッカーマン』が作者自身の「体験文学」であることにあくまで反対する Blaschka は考えたりもするのである。

ついで Doskočil は Schüttwa (= Stibor) 村の住民が、大部分チェッコ人であったことから、その出身で、しかもその司祭であった Hensinus はチェッコ人であったと考える。そしてその息子、つまりヨハネス・フォン・テンプルもチェッコ人であったに違いないと言っているのである。しかしヨハネスの母については何もわかっていないし、彼がチェッコ人であったという確証があるわけではない。司祭たちが、チェッコ人とドイツ人の住む教区で、説教に、告解に、また子供たちとの会話に両語使用の必要に迫られたことは想像に難くない。またヨハネス・フォン・テンプルが職務柄、豊富なラテン語の知識をもち、チェッコ語とドイツ語のバイリングイストであったことも十分考えられる。しかし、中世後期最大のドイツ語の散文家がチェッコ人であるという可能性については、Krogmann はもとより、チェッコ生まれの Blaschka も否定的である。

チェッコの研究者の間には、『アッカーマン』の翻案と見做されているチェッコ語の散文作品『Kradleček』を、ヨハネス・フォン・テンプルの弟子か、直接その影響下にある人の手になるものと見る人が少なくないが、『アッカーマン』の作者

がチェッコ人であったと考える Doskočil は、さらに一步進めて、『Kradleček』の作者は、『アッカーマン』の作者と同一人ではないかという問題を提出しているのである。

『Kradleček』——Krogmann は『Kradleček』が正しくと主張する。Kradleček (= Weberlein) は Kradleček (= Weber) の縮小語である——の成立は一四〇九年ごろと推定されるが、その内容は『アッカーマン』に酷似している。「農夫」が「織匠」に、「死」が「不幸」と入れかわり、不実の恋人 Adiliska をめぐって、「織匠」と恋人を自分から引きはなした「不幸」の間に論争が交わされるが、結局、織匠は悲しみに耐え、運命との間に和解が成立するのである。

Doskočil が提出した問題は、彼自身いろいろの難点のあることは承知していたようであるが、未解決の『Kradleček』の作者問題に論争の火を点ずることになった。Blaschka と Krogmann が早速この討論に加わったが、惜しいことに、火つけ役の Doskočil は翌一九六二年に五十三歳の若さで急逝し、論客 Krogmann もまた、一九六六年には永久に学界から姿を消してしまった。チェッコのこの作品が『アッカーマン』研究に今後一層大きな役割を演ずるのであることは、十分予想されるが、残念ながら、私はこの作品のほんの一部しか読んでいないので、この作品をめぐる諸問題は、後日改めてとりあげることになしたい。

Johannes von Tepi はイタリア旅行をしたか

モンテゲンの Hammerich は一九五二年以来、一連の論文において『マッカーマン』とイタリアとの関係を執拗に追いつづけている。イタリアはヨハネス・フォン・テールに比べてあこがれの国であった。彼は永遠の都を追遙して、古典古代の遺跡を自分の目で見たいと切望していた。Hammerichによれば、夢が実現して、彼は一四〇〇年、「ドイツ最初の考古学者」としてイタリアの地を踏むのである。一四〇一年十月 Brescia の戦闘を目撃した。その体験は『マッカーマン』第十七章に織り込まれた。いやそれはかりではない。彼のイタリア体験は作品の後半部にいろいろな形であらわれている——と Hammerich は主張するのである。ヨハネス・フォン・テールについてわれわれは多くを知ることができない。彼がイタリアへ旅行したという確証は何一つないのだが、『マッカーマン』第十六章の牛に乗った死神をめぐる興味ある Hammerich の考証に、われわれはしばし耳を傾けよう。

問題の箇所を Hübner 校訂本 (Kap. 16, 21—30) に引用すれば、次の通りである。

Du fragest, wie wir sein: Unbescheidenlich sein wir. Doch etwanne vnsere figure zu Rome in einem tempel an einer want gemalet was als ein man auf einem ochsen, dem die augen verbunden waren, sitzend\*; der selbe man furte ein hawen in seiner rechten hant vnd ein schaufel in der linken hant. Damit facht er auf dem ochsen. Gegen im slug, warf vnd streit ein michel

tenige volkes, allerlei leute, iegliches mensche mit seines hantwerks gezeuge; da was auch die nunne mit dem psalter. Die slugen vnd wurfen den man auf dem ochsen in vnsere bedeutnuß; doch bestreit der Tot vnd begrub sie alle.

問題は※印を付した *sitzend* である。sitzend の位置は校訂本に於いて一致せず、たゞそれは Jungbluth 校訂本 (一九六九年) に於いて…als ein man *sitzend* auf einem ochsen, dem die augen verbunden waren となつてゐるが、Hammerich はこれを大胆に次のように読みかへるのである。

…als ein man auf einem ochsen, dem die augen verbunden waren *netzweis*.

つまり、牛に乗った男が目隠してゐるのではなく、男の乗つてゐる牛の目が細のようなものではられてゐるとどういふのである。『Trakdiebek』にもこれに應ずる箇所があるが、問題の *sitzend* に近き語は欠けつゝ *na tom wolu bylo gest miest tlmoka uwarzano siehne teneto*。即ち「この牛には袋 (制御用?) の代りに網がこぼりつけられていた」とあるのである。Hammerich の *netzweis* は *リビリヤ* を得たものである。そこで彼はこれをカプタール美術館所蔵の Juppiter Dolichenus の *リリオン* (図版参照) と結びつける。この *リリオン* は、『マッカーマン』の最初の校訂本 J. Knieschek 版 (一八七七年) の中で Bendorff が注記してゐるが、これは Hammerich に第一のヒントとなつた。図版の左端の



JUPPITER DOLICHENUS

牛の上に立った戦士像が Jupiter Dolichenus である。右端に Juno Regina、両者の間に Serapis と Isis が立っている。Jupiter の乗っている牛の額に散らばっている小穴を、Hammerich は「網」様のものと見るのである。『アッカーマン』の作者は Avenia の丘の上の Jupiter Dolichenus 寺院の廢墟の中にこのリエフを見たのであろう。『アッカーマン』における描写にあてはめながらこのリエフを眺めると、興味津々たるものがある。包圍する多くの人間たちと激しく渡り合う死神、右端は絃楽器を投げつけようとする尼僧である。

さて、『アッカーマン』第十六章で死神は自らの仕事の公平さを自讃しているが、死神が目隠ししているのは、そのような死神の公正な業を象徴するものであると解されるし、また、牛に乗り、目隠しをした死神像のモティーフが、アルプスの北側で見られることも、かつて Heilmut Rosenthal が説いたところである。いまのところ Hammerich の説は大胆な仮説にとどまっているが、もしヨハネス・フォン・テューブルが実際にイタリアに遊んだとするならば、彼のイタリア旅行はまさにゲーテのそれにも比すべきであろう。『アッカーマン』の第一一十四

章と第十五—三十二章との間にある断層のあることは、しばしば指摘されるところである。たとえば Thieme<sup>(21)</sup> はリズムの面からこれを証明した。またアッカーマンが第二十七章で再婚について死神に助言を求めているのは、愛妻を死に奪われ、身も世もないほどに、悲歎に暮れている前半からすれば、いささか奇異の感を免れないが、前半部と後半部の間に、ある時間的経過があったとすれば、そしてその間にイタリヤ旅行がはさまったと考えれば、納得がゆく。アッカーマンの妻が死んだ年である一四〇〇年は、たしかに Jubeljahr<sup>(22)</sup> であるが、ローマのそれは一三九〇年であり、ボヘミアでは一三九三—九四年が Jubeljahr<sup>(23)</sup> であるところから、Hammerich は『アッカーマン』の前半部の成立を一三九三年以後、後半部の成立を、Bresciaの会戦のあった一四〇一年頃と想定している。しかし、Hammerich 説がきびしい批判に耐えるためには、何よりもまず、ヨハネス・フォン・テンプルのイタリヤ旅行が何の目的で、そしてどのようにして行なわれたか——その辺の事情が明らかにされなければならない。

## 『アッカーマン』第二稿

cum libello ackerman de nouo dictato——これはじつむる「献呈書簡」の冒頭の句である。この中の de nouo は「う「ちかいら」とか、「最近」とか、という意味に解されてゐるが、Günther Jungbluth<sup>(24)</sup> は上の句は「新著『アッカーマン』」

即ち「改稿『アッカーマン』と解すべきだという、新しい解釈を提唱している。これは注目すべき主張である。Jungbluth はこの eine zweite Fassung を「写本目と結びつけて考えているのである。この意味において、昨秋ようやく刊行された彼独自の校訂本は重要である。

Jungbluth は長らくクムメンハーゲンにあり、『アッカーマン』研究における第一人者 Hammerich のよき協力者であったが、一九六七年、招かれてボンへ移った。そしてこれを機に、長年温められていた彼の『アッカーマン』がいよいよ世の光を見ることになったのである。まさに、その一部は示されたが、いまその全貌に接することができるようになったのは、よろこばしいことである。いま、われわれの手にあるのは、テキストを主とする第一巻だけである。第二巻には、文献学的・言語学的注解が収められるという。《Traktat》のドイツ語訳をも含むはずの、Hammerich-Jungbluth 共著の第二巻は、第一巻刊行（一九五一年）以来、ほとんど二十年を経た今日、なお未刊であるが、それだけに Jungbluth の『アッカーマン』第二巻の速かなる出版が切望されるのである。『アッカーマン』研究における最大の難問題はテキスト批判の問題であるが、Jungbluth 校訂本の詳しい紹介は他の機会にゆずらなければならぬ。

(21) A. Blaschka: Zwei Beiträge zum Ackermannproblem. Deutsch-tschechische Beziehungen im Bereich der Sprache und Literatur, hrsg. von B. Havránek u.





- im Ackermann aus Böhmen. *Humaniora. Essays in literature, folklore, bibliography, honored by Archer Taylor*. New York 1960 (S. 17—25), S. 17
- (22) H. Rosenfeld: Das römische Bild des Todes im „Ackermann“, *Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur* 72 (1935), S. 241 ff.
- (23) 注(2)の論文九七頁、同拙評九〇頁参照。
- (24) G. Jungbluth: Probleme der Ackermann-Dichtung. *Wirrendes Wort* (1968) S. 153

- (25) Friedrich von der Leyen: *Deutsche Dichtung des Mittelalters*. Frankfurt 1962, S. 830—47 (Kap. 1—6, 10, 14, 16, 17, 28—33)
- (二十六〇・二一・二四) (一橋大学教授)

後記

Diskett 論文およびチェッコ語に関していろいろとご教示を賜わった鈴木秀勇教授に心から謝意を表した。